

て、私の経験からもう一つ紹介したい。それは、昭和48年夏に会津民俗館内に南会津地方の古民家を移築復元したときである。この民家は、「旧馬場家住宅」で国の重要文化財に指定され、保存公開されている、私はこの民家の解体から復元にいたる作業に携わり、大工や屋根葺き、左官などの職人の手伝いを行いながら、その伝統技術をつぶさに観察することができた。いっしょに汗を流しながらの観察と聞き書きは、私にとり何よりの調査となった。そのなかで土間のタタキ製作は、粘土に塩(ニガリ)をまぜ、これを槌でたたきながら固める作業は、私の仕事となった。土間は二ワと呼ばれその家の顔といわれ、

農作業や夜割仕事の大切な場であった。この製作を担当し、できあがったときの喜びは今でも忘れられない。こうした体験が、後の民家研究において大いに参考となった。

以上、私の経験から博物館における体験学習について紹介した。民俗学を専門にする私にとって、民俗技術などの体験学習は今後の研究にとっても重要であることを痛感しており、その体得を目指している。まさに、非文字資料としての民俗技術の体得である。学芸員自らこうした体験を生かした博物館活動を行っていく必要を感じている。

「昔のくらし」の展示すること

青木 俊也(松戸市立博物館 学芸員/COE教員)

The Making of New Exhibitions of Past Cultures

AOKI Toshiya

はじめに

このニュースレターの6号で「展示における昔を考える」と題して、小学校4年生の社会科のカリキュラムに関連させた学習資料展、いわゆる「昔のくらし」展において、どのような時代を展示しているのかを考えてみた。この展示は、今日では失われてしまった生活の知恵や技を生かして自然環境を利用していたくらしを出発点に、現在に至る身近な生活の歴史を対象にしている。そのなかで表現される「昔のくらし」が、地域の古老や祖父母世代が経験した戦前のくらしから、父母世代が経験した戦後のくらしへと時代設定の比重を移していることを述べた。そこには、この十数年間「昔のくらし」展が開催され続けている状況のなかで、子どもに昔を伝える身近な大人の生活経験の推移が要因となっていることを考えた。このような生活経験の変化は、歴史系博物館において戦後生活の資料を収集対象にし、その結果、家電製品を備えた昔のくらしを表した戦後生活再現展示という新たな動きをつくり出している。

それでは、博物館において展示されたテレビが置かれていなかった戦後生活以前の「昔のくらし」は、どのような時代の生活を表しているのだろうか。

野外博物館における民家の生活再現展示

さて、「昔のくらし」を再現した展示における具体例の一つとして、野外博物館における民家の生活再現展示を挙げることができよう。この写真(1、2)は、スウェーデ

ンのストックホルムにある1891年に設立された世界最初の野外民家博物館であるスカンセンで展示されたくらし(兵士の家)を写している。伝統的な家屋を中心にその屋敷、耕地、家畜なども含んだ生活環境と、そこでの生活者に扮したスタッフの活動を混じえた生活の姿が再現されている。スカンセンの生活再現展示は、リビングヒストリーミュージアムとして多くの影響を他国の博物館に与えたと指摘されてきている。

この国の本格的な野外民家博物館は、戦前において日本民族博物館の野外展覧が計画され、今和次郎によってスカンセンを模した鳥瞰図が作成されたがその時にはつくれず、戦後になってから日本民家集落博物館などによって実現されたことが知られている。現在、40数館を数える野外民家博物館のなかで、実際規模の一軒の家屋敷として、主(母)屋、付属屋を配置した屋敷地、さらに周辺の耕地を揃えた生活環境を再現した館は、1986年に開館した千葉県立房総のむらまで待たなければならなかったと私は考えている。それまでの一般的な傾向としては、各館で独自の生活環境の整備を行っていること、移築する民家の位置する散村と集村の屋敷地の違いを踏まえても、屋敷地全体ではなく、主屋を単独で移築していることが多かったのは確かであろう。

それでは、なぜ、主家が単独で移築されたのだろうか。もちろん、各館の敷地面積、予算規模などの経済的な要因による影響が大きいと考えられ、その理由は個別に検



At museums, the restoration of exhibitions, for example houses, huts and so on,
is not to make them What they were , exactly.
There is a clean and strong intention at each museum,
and it depends on how we define the term restore and what it means to museums.
So, we can imagine various ways to try to make exhibits What they were .

討しなければならない。しかし、その基礎的な作業として各館の展示に共通して影響を与えた民家研究面における志向ともいうべき事柄について考えてみたい。

戦後初めての本格的な野外民家博物館として1960年に開館した日本民家集落博物館は、飛騨白川の合掌造りの民家が豊中市に移築されたことを契機として、「厳密な調査に基づき学術的に復原する」という方針から全国各地から存続の危機にある民家を移築している。この方針の意味するところは、民家の現状から改築、増築の過程を建築当初の姿にまで追跡し、復原することにある。この博物館の開設に尽力した鳥越憲三郎は、秋山郷の民家を復原すると床が一切なくなり土間になったと述べている。民家の建築当初の姿を明らかにしたのは復原的民家研究といわれる研究方法で、大正期から始まった民俗学研究者などによる民家研究が「現状形態に注目した採集を中心と」したもので「どのような発展経路を経て現在に至ったのかなど復原的な事柄はほとんど明らかに」していないとの反省に立った戦後の民家建築史の研究成果

であった。先の主屋を優先して移築した野外民家博物館の状況は、戦後の民家研究においてその歴史的推移を明らかにするために、復原的研究方法によって各地の古い民家、主屋の建築を特定し、文化財指定などの保存措置の一つとして、野外民家博物館に移築することが進められた結果であった。そして、多くの民家が建築当初に復原されることになった。その意味で、多くの野外民家博物館は第一に民家建築の博物館としての性格を持っているといえ、それゆえに民家の生活を展示表現することは副次的な扱いを受けることもあったと考えられる。

それでは、建築当初に復原された民家の生活は、どのように再現されたのだろうか。建築当初から移築時までに行われた改築、増築は、生活の容れ物としての民家に住んだ人たちの生活の軌跡であることに対して、復原はそれを消したことを意味している。一般的には、移築する民家、その集落で使われた民具などの生活資料は、移築時などに収集し、その生活資料として展示されることが多いと考えられる。厳密にいえば、収集された民具の使用時期と民家の建築当初の時期には、ある時間差が生じている可能性があると考えられる。その時間差をなくせば、国立民族学博物館で開催された「ソウルスタイル2002」が示したように、生活ありのままに近い、冷蔵庫の中身まで密度高く生活を再現することも可能となる。つまり、民家の生活再現展示にとって、調査時点に近い時間の生活の再現展示であればあるほど、調査で得た情報を多く生かすことが可能となる。民家建築史を体現する程の野外博物館に保存された多くの民家は、近世期のいずれかの建築当初の姿に復原されていると考えられ、移築時点で調査した生活、収集した生活資料と大きく時間が隔たった復原した民家のくらしを整合することは、時代が遡るほどに生活の情報も少なくなり、調査ではつかめない想像する部分が増えるなど困難を伴う作業だと思える。

実際の民家のくらしは、各博物館によりそれぞれに表現されているが、戦後につくられた多くの野外民家博物館では、建築当初の近世期に復原された民家における生活の再現という共通した状況を迎えることになった。そ



写真1



写真2

のなかで、どのような民家の「昔の暮らし」が再現されたのかは、個別に実証していく他はない。ここでは、戦後の民家研究における建築史研究の進展によって近世期の民家の多くは建築当初の姿が復原されたこと、そのことによって、生活再現展示は大きな規定を受けることになった可能性を確認した。

おわりに

それでは、最後にこの基礎的な作業から始めている民家における生活再現展示のあり方を探ることの見通しについて、少し触れておきたい。

実際に建築当初に復原された民家の生活再現展示は、どのように行われたのだろうか。また、一方でわずかだが存在した民家を建築当初に復原せずに移築した野外民

家博物館では、どのような生活が再現されたのだろうか。先の千葉県立房総のむらにおいて、実際の野外博物館としての活動によって生活再現展示はどのような進展をみせたのだろうか。そして、それらの博物館において再現された「昔の暮らし」は、どのような年代だったのであろうか。これらの問いかけに答えることによって、民家の生活再現展示の姿をさぐりたいと思う。

さらに、先述の戦前における野外民家博物館の構想においてどのような生活が再現されようとしたのだろうか。それを確かめるすべはないのだが、今和次郎の民家研究を反映した生活再現展示をつくるとしたらどのようなものになるのかを、可能であれば想定してみたいと思う。今、このことに取り組んでいる。

常民企画展の紹介

巻物の伝える世界 職人・由緒・儀礼

会期：2006年10月25日(水)~12月15日(金)
会場：神奈川大学横浜キャンパス3号館1階
常民参考室



常民参考室の本年度の展示。第10回常民文化研究講座「職人書物 書承と口承の交錯」(2006年11月25日)と関連する形で企画された。

